

# 多様な職域に従事する保育士の専門特性に関する検討 1

## — 知的障害児施設での保育士業務から見えるもの —

柴 田 長 生・後 藤 紀 子

### 1 はじめに

保育士が従事する職域は多岐にわたる(柴田、2011)。異なる専門領域で活躍する保育士たちの「保育士の専門特性」を考察するために、これまで児童相談所一時保護所・婦人相談所保護所・乳児院・児童養護施設・保育所の保育士にインタビューを行い、保育士業務の内容を検討してきた(柴田、2011：2013：2014 以下「先の論文」と略す)。配属職域によって、保育士が有する専門性の展開が大きく異なるので、各職域での保育士業務を具体的かつ詳細にインタビューすることを通して、保育士が有する対人援助職としての多様な専門特性を考察することが本研究の目的である。先の論文での考察から見えた、これまでに取り扱った職域における保育士業務の専門特性をまず概括しておきたい。

相談機関の一時保護所の保育士は、福祉的介入を要する相談のただ中にいる子ども(母親)の現在に寄り添いながら「素の関係」で受け止め、平行するソーシャルワークに対して、それとは別の「よりケースに近い」ポジションで、子どもの生活全般に関与することに自らの業務特性を認識していた。「評価したり、操作したりしない」関わりの徹底や、「被援助者との距離感」に鋭敏であることなどが特徴的であった(柴田、2011)。

乳児院や児童養護施設の保育士は、「子ども

と生活を共にし、子どもを育てること」が主要業務である。親に代わって一定期間育てる(共に生きる)ことは容易なことではなく、施設での子育ての背景にある「実親子関係構造の存在」に対して、養育者としての自らのポジションを形成することにしばしば大きな葛藤が生じる。そのことへの受容過程(時には自らの生き様が関与する)を経て、子どもの実親への思いや、親子関係形成や、家庭復帰の実現に対して「子どもの喜びと幸せ」という観点から客観的に取り組めるようになる(柴田、2013)。

保育所保育士は、地域の中での健全育成業務であり、「子どもは毎日家庭へ帰る」ということを前提に保護者も同時に受け止める。しかし保育士の主要な活動は日々の活動である「あそび」の重視であり、「あそび」への共感性と信頼をベースとする「子どもの主体性と自律性の尊重」の徹底であった。同時に子どもの成長原理を集団形成の中に求めており、子ども全体への関与の中で、個々の子ども達を個別に受け止めるという「距離感」と、相対的な受け止めのセンスが保育士の専門特性であった(柴田、2014)。

このように、単一資格である保育士が依拠する業務展開上の基盤は、配属された職域によって大きく異なる。本稿では、先の論文における検討の延長として、知的障害児(AAIDD、2010)を支援する中堅保育士3名にインタ

ビューを行い、知的障害児支援業務における対人援助職としての保育士の専門特性に関する考察を試みる。

## 2 研究方法

知的障害児母子通園施設（児童発達支援センター）の就学前幼児担当保育士（以下、Aと略す）、知的障害児入所施設（障害児入所施設福祉型）の中軽度障害児グループ担当保育士（以下、Bと略す）、同じく重度障害児グループ担当保育士（以下、Cと略す）に、約1時間程度のインタビューを行い、同意を得て録音した。B、Cは、知的障害児入所施設で18歳までの児童を担当している。3名の保育士は、いずれも40歳前後の主任クラスの女性中堅保育士である。

知的障害児母子通園施設の業務が、各家庭から療育のために通ってくる就学前幼児とその保

護者への発達支援業務であるのに対して、知的障害児入所施設は、虐待などのために社会的養護を必要とし、あるいは親子関係の脆弱さや強度行動障害（厚生省、1993）などのために家庭での養育が限界に達した学童期以後の児童を主に対象とする生活施設であるので、施設の設置目的はかなり異なる（注記）。しかし、いずれの保育士も知的障害児に対する支援業務に従事しているので、幅広い保育士業務への考察という研究の趣旨から今回のインタビュー対象とした。

インタビューにあたっては、下記の聞き取り内容を印字して手渡し、各質問項目に沿った半構造面接を行った（先の論文における聞き取り項目とほぼ同一の構成）。しかし実際のインタビューでは、必ずしもこれらの聞き取り項目のみにこだわらずに、ある程度自由な会話形式で面接した。

### 保育士インタビュー質問項目（知的障害児施設編）

#### 質問1 保育士の業務

保育士の仕事（業務）というのは、一般的にどのようなものだと思いますか。

#### 質問2 勤務先の保育士業務

- ① 今のポジションにおける、「保育士としてのあなたの仕事（業務）」は、どのような内容ですか。
- ② あなたの今の業務の中で、保育士として、どのような事柄に（何に）対応されていると思われますか。
- ③ 対応に苦慮されていること、対応に多くのエネルギーが必要になるのはどのようなことについてでしょうか。
- ④ 今の仕事の中で、大切にしたいと思っておられることは、どのようなことですか。

#### 質問3 対人援助業務としての保育士業務

- ① 「対人援助」という視点から振り返ると、保育士としてのあなたの今の業務は、どのようなものだと思いますか。

先ほど質問2でお聞きした①～④の事柄を、「対人援助」というキーワードから、あえて振り返り直してみ、お話ししてください。

- ② あなたの今の業務における「対人援助者」としてのポイントは（大切な事柄）、どのあたりにあると思われますか。
- ③ 今お聞きした「大切な事柄」は、どうして「大切である」と思われるのですか。  
具体的な事例やエピソードを通して、お聞かせください。
- ④ 「対人援助」という視点から、今の業務において「大変なこと」「御苦労されていること」「課題」などをお聞かせください。

#### 質問4 障害支援業務ということについて

最後に、「障害支援」という観点から、あなたの今の業務を自由に振り返ってみてください。

また、このインタビューを通して、お話し足りないことがあれば、何でもお聞かせください。

注記) 障害児施設の一元化をはかった平成24年の児童福祉法改正により、障害児に関する施設種別は障害児通所支援と入所支援の2つのカテゴリーに法制度として明確に規定された(厚生労働省、2012)。またこれを受けて、厚生労働省の障害児支援の在り方に関する検討会(座長：柏女霊峰氏)により「今後の障害児支援の在り方について(報告書)～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～」がまとめられ(2014)、障害児に対する施策や福祉支援体系が、法制度に基づいて詳細に述べられている。

### 3 インタビュー結果

インタビュー結果の分析に当たっては、まず逐語記録を作成し、この領域における保育士の専門特性を示していると思われる語句や表現内容をマーキングした。そしてマーキングされた内容を類似内容別に分類し、分類された聞き取り内容に関する共通するヘッドライン(以下、「主内容」と称す)を抽出した。なお主内容Ⅰには、各保育士の事業内容を記述している。

「主内容」と、分類された各保育士毎の聞き取り内容の主要なものを、保育士毎にまとめたのが表1である。3名から聴取した内容は随分異なっていたが、知的障害児支援に従事する保育士の支援業務の対象とそこでの専門特性は、表1のⅠ～Ⅶの項目に分類することができた。このことから、知的障害児支援に従事する保育士の専門特性は、表1に示した「主内容」項目において発揮されるといえよう。そして専門特性が発揮される具体的な内容については、A～Cに各欄に表記したとおりである。以下の考察では保育士が有する専門特性について、表1をインデックスにしながら考察を試みる。なお、以下の考察において引用しているエピソードは

聴取内容に基づいており、考察中に表1の「主内容」項目を示す場合にはローマ数字で(例：Ⅰなど)、各保育士からの聴取内容を示す場合にはローマ数字と保育士名で(例：ⅡAなど)表記している。

## 4 考察

### a 保育士が関わりを開始する時 ～保育士業務の立脚点～

3名の保育士が従事する事業内容はⅠに示したように異なるが、保育士が関与を開始した時の親子の年齢や様子は様々であり、Ⅱに示したように施設利用に至った契機(ニーズ)は全く異なる。その差異の検討を通して、知的障害児支援に従事する保育士業務の多様な立脚点についてまず考察する。

#### a-1 ニーズの違いと支援の必要性

それぞれの施設における施設利用時の状況は、具体的には次のような状況であった。

我が子の障害を告知された時に子どもに関心を向けられない、あるいは子どもにどう向き合っていないか分からない(ⅡA)。虐待などの劣悪な養護環境や貧困のもとで、子どもは様々な問題行動(学校内トラブル・放火・性的な問題行動など)を呈する(ⅡB。問題行動を示す子ども達は、他方で社会からの疎外感を有しているという)。嘔吐・蹴る・叩くなどの行動障害が長く続き、親は養育に疲弊しきっている(ⅡC)。

Ⅱに示したように、支援開始時の児童の状況は異なるが、知的障害児へ保育士が関与を開始する時点で、その背景には何らかの困難な状況や行き詰まりが存在している。誤解を恐れずに述べると、子育て・子育てが様々な理由で、親による養育だけでは立ち行かなくなってしまう

表1 3人の保育士へのインタビュー内容の概要分類

主内容	A	B	C
I 業務の形態	就学前母子通所指導	中軽度知的障害児入所指導	重度知的障害児入所指導
II 施設利用の契機など	障害告知を受けて間もない母子 *専門機関の勧めによる入所 *よくなることへの(過剰)期待 *先行き不安の高さ	困難な家庭状況 *親も障害者が少ない *虐待等による要保護児童 *背景に様々な貧困がみられる	子どもの行動障害による養育の深刻な行き詰まり *子どもを抱え続けた末の利用 *最終段階の受け皿
III 保育業務(対人援助)の特徴	子どもに応じた試行錯誤の連続 *時間をかけてゆっくり見守る 「初期子育て」のお手伝い 子どもの発達の代弁者 子どもが親以外に初めて出会う人 親への業務ウエイトの高さ 母子関係に寄り添う	子どもへの生活実感の付与 達成感・満足感の向上 全生活を通した指導 親子双方の代弁者	子どもにとって先がわかる関与 安心感の付与 → 生活や対人関係に対して 全生活を通した指導
IV 利用する子どもの特徴	発達の初期段階の子ども 様々な障害種別・行動特性 まだ明確ではない障害像・発達像	様々な問題行動を有する 社会的劣等感情が高い 自尊心・自己肯定感が低い 自分の障害認知ができていない	自発活動の不活発 行動障害を有する 入所後の家庭復帰は少ない 混沌とした対人関係・生活世界
V 保育士としての子どもへの関わり	遊び、対人・対物行動のサブステップ化 子どもの行動特性・障害特性の個別把握 興味、遊びの開発	生活を通した、具体的な反復指導 会話できる関係、意志表示できることの疎通 会話・意思疎通を促す 生活リズムを整える	要求・欲求表出の促進 対人関係の萌芽の発見 プリミティブな子どもの興味・関心の発見 衣食住にリズムをつける 子どもが動き出すわずかなタイミングを見計らう
VI 親指導	子どもに関心が向かない親 若年親 子どもの発達を肯定的に受け止めることができるために *子どもの行動を見せる *子どもの発達像の解説 *不安を受容し、アドバイス *辛さ、不安の傾聴	希薄な親子関係をつなぎなおす *親子間の希薄なコミュニケーションの仲介 *面会・外泊の促し、サポート	子どもの行動障害による養育の行き詰まり *親へのねぎらい *親の罪障感への癒やし *入所させてホッとさせる *家庭復帰は長い見通しで
VII 業務を通した保育士の手応え	親指導にこそウエイトがかかる 子どもの発達の速度に応じて、時間をかけてゆっくり見守ることができる 親子・家族を同時に扱うことができる きょうだい関係なども含めて	生活を共にすることで子どもに寄り添う 子どもが見られたくない・触れられたくないところは、そのことを承知しながら、あえて触れてやらないこと → そのことから対人関係が開かれる 自信のない子が、見守りによって自力で何かできた時	何らかの対人反応の萌芽が見られた時(笑い) 他者認識や自分認識ができはじめた時 サバイバルな場面での関与が有効 親子が楽になったと感じられた時 保育士に余裕がないと関与できない 子どもの成長を見ることができる

た時に、保育士による支援が開始されることになる。それ故、この局面での保育士の参与は、通所・入所を問わず、何らかのニーズや課題に継続的に応えることの開始であるが故に「福祉的」である。支援を開始する形としては児童養護施設の場合と似ているが、社会的養護の場合

は、主に大人の側の事情によるニーズであるのに対して、知的障害児施設の場合は、大人の側のニーズだけでなく、何よりも子ども自身が「知的障害」を有していること(そのことがニーズの中核を形成していること)が大きな特徴であり、障害を有しながら成長する子どもそのものの



をどう支えるかが（そして障害児を有する親の子育てをどう支援するかが）、ここでの保育士の大きなテーマとなる。

保育士の基本業務は、倫理綱領（柏女、2009）にも謳われているように、「一人ひとり子どもが心身ともに健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、生きる喜びと力を育むこと」であり、様々な職域を超えた保育士の専門性の基盤となっている。それでは、障害を有しながら発達し、それぞれの親子関係の中で「今・この時」を迎えているそれぞれの知的障害児の「生きる喜びと力を育む」とはどういうことであろうか。

#### a-2 子ども像の違いに対して

Ⅱで示した状況のもとに、Ⅳのような特性を有する児童への支援が開始されるが、各児童の臨床像や発達課題は一人ずつ異なる。知的障害児への支援は試行錯誤の連続である。しかもその障害故に、日々の状況に応じてやりとり関係が支援場面で展開出来るかどうか流動的な場合が多い。曖昧かつ流動的で、持続しないこともある（あるいはワンパターンで拡がってこない）子どもの活動を生活世界の中で受け止め続け、関係性の軸を少しでも形成しなければならないのが、この領域の保育士の業務である。

母子通園施設には、障害を宣告されて間もない頃に、障害を有する子どもの成育に不安（場合によっては拒否感）を持ちながら、日々どのように養育していいかわからない（あるいは支援を求めている）母子が通所する（Ⅱ A）。保育士は、子どもの育ちと障害に関する基礎知識を基礎に据え、新たに出会う子ども達の曖昧な活動の中から、子ども毎に異なる発達の糸口を少しずつ発見し、関わりを通して子どもの活動世界を拡げていきながら、療育経過を母親と共有し、母親を支え、時には母親を教育する。子

どもの生活全体（育ち全体）を通してこれらを展開するのが保育士の仕事であるが、「療育的」といえる援助活動を通して個々のニーズに応える（Ⅲ A、Ⅳ A）。

一方、入所施設である知的障害児施設には、様々な劣悪な家庭状況の末に子ども達が入所してくる（Ⅱ B、Ⅱ C）。それ故、入所する子どもはほとんどが学童期以降の年長児である。様々な社会的要因からの影響を受けて入所してくる知的障害を有する子ども達の日々の生活をまず受け止め、リズムあるものとして生活を確立させる（Ⅲ B、Ⅲ C、Ⅳ B、Ⅳ C）。このような生活に立脚する養護原理に基づく実践は、基本的には児童養護施設における専門性と同一である。しかし知的障害児施設の場合は、障害を有しながら日々の社会生活を実現させていくために、子どもと共に取り組む場面や内容・子どもとの対人関係などが、児童養護施設における展開とは大きく異なる。これまでの生育の中で様々な社会的・心理的ハンディキャップを背負っている子どもに対して、基本的な子ども理解・障害理解を基盤に、個々の子どもにとって了解可能・反復可能なレベルにまで生活構造をかみ砕き、根気よく取り組まれる。知的障害児施設の場合はこのような「生活支援」である。

特に C の場合は、障害の重い子ども達の対応となるので、施設での生活がまず「安心できる」ものであるということの確立を、行動障害を伴う重度の障害を持った子ども達が安心できる具体的な「行動・関係のチャンネル」を発見するところから開始する。そのことによって、子どもは先が見えるようになって来、安心感につながるといふ（Ⅲ C）。知的障害児への生活支援のためには、どこからでも安心感の基盤を発見できる「療育的センス」が必要条件となる。これなくしては、子ども達の生活の安定を実現させることができない。C は「子どもの笑顔に

よって保育士は嬉しくなる」(Ⅶ C)と語ったが、このような受け止めによって、肯定的な他者として養育者 (= 保育士) を認識でき始めることが可能となる。生活を通した子どもの育みは、単に子ども側の充足だけでなく、育む側の保育士との相互関係や、大人・子どもの相対的な成長によって生み出されるからである。そうでなければ、子ども達の心に届かないのである。児童養護施設の養育原理にも、「共に成長しようとする大人の存在の重要性」が謳われているが(全国児童養護施設協議会、2008)、知的障害児の生育において、それらをどのように実現させるかという点に、この領域の保育士業務特有の専門性が認められる。

#### **b 子どもの兆しを受け止め、あいまいな子どもの活動を開く、細やかさと具体性**

次に、各保育士の子ども達への関わり方の検討を通して、知的障害児支援における保育士業務の内容について考察する。

援助対象である知的障害児は、「今・この場で」関心を開き、具体的な関わりや関係行動をなかなか開始できないことが多い。それ故保育士は、Ⅴに示したように、何かが開始できるその兆しや端緒を、ごく些細なところから具体的に発見する。そして、個々の子どもが受け止めることができる具体的なチャンネルや具体的な関わり内容などを繊細に感じ取り考えながら、たとえ断片的になってもいいから(あるいは関わりが完結しなくてもいいから)、関わりを開始し、関係性をめざした細やかなステップづけを試みていく。3人のインタビューから、知的障害児施設の保育士達の、上に述べたような細やかさと兆しや端緒を具体化する力量の高さに気づかされた。語られるエピソードが、保育所保育士からの聞き取りとり内容に比べて、遙かに細かくて個別的・各論的・具体的な印象

を持った。そしてこのことが、この領域に従事する保育士の専門性の基盤を形成しているように思われた。

#### **b-1 関係活動のサブステップ付け(微視的取り組み)**

Ⅴ A に示したように、A から聴いた、粘土遊びへの療育展開の中での保育士によるステップ付けのエピソードは、実に細やかで具体的であった。子ども達が、おそらくは外の世界に初めて出会ったであろう「粘土」という素材を、着色などの工夫をしながら子どもの関心を高め、子どもに抵抗感を与えないような細やかなステップをつけてすこしずつ提供し、外の世界(外的対象)への感触と活動に誘っていく。子どもへの素材提供の仕方を、受け止める子どもの様子を見ながら微妙に調整・変更し、いやがる場合には強要せず、じっくりと時間をかけて子どもに応じた様々な工夫の元に「粘土」という素材を提供する。このような素材提供における子どもとの間の「押し引き」は、不確実で勢いのない障害を有する子ども達(Ⅳ A)の、その時々「外界へ向かうトーン」を繊細に聞きわけているようにも思われた。これらの子どもに合わせた「チューニング」は、それぞれの子どもによって全て異なる。そして、子どもに応じたステップ付けを行うことが、それぞれの子どもの遊び・興味の開発につながるという。一人ひとりの子どもの遊びの提供という保育士の基本業務の中に、このような配慮と気づきが重なっている。これらの取り組みは、障害を有する子どもの発達経過(活動経過)の一場面への「微視的取り組み」の細やかさと言い換えることもできよう。

保育士は TPO に応じて、その時々の子どもの活動の様子を具体的に発見する。治療教育者や、臨床心理士によるプレイセラピーでの子ど

もの受け止め方とも共通する態度や視点を有しているように思われる。異なるのは、治療や教育といった目的の遂行が主人公になるのではなく、子どもの遊びや、その時遊び始めることができた、その時々の子どもの姿が主人公であるという点であろう。

また設定保育の目的は、設定目標の完遂ではなく、活動プロセスそのものであり、あえて曖昧で未完結な状況であっても、より多様な遊びの提供を相対的に行いながら、子どもが自発的に開いていけるような外界活動へのチャンネルを拡大させることを、障害児療育の大きな目標としている。

#### b-2 生活全般を受け止める(巨視的取り組み)

一方入所施設の場合は、VB・VCに示したように、24時間の生活全般にわたって子どもたちを養育し、しかも入所期間が比較的に長いので、母子通所施設での対応と異なる「巨視的取り組み」が大前提となる(生活リズムの維持など)。そして、そのような大きな枠組みの中での、その時・その場における受け止めや対応の細やかさが保育士の専門性となる。

主に年長児を受け止めるBは、中軽度障害児の受け止めにおいてポイントとなるのが、言葉によるコミュニケーションであるという。Bが担当する子どもたちには様々な養護要件の劣悪さを背景に持ち、様々な問題行動を有していることは先にも紹介したが、例えば障害を持った子どもがネグレクトされ、様々な問題行動や不登校などの症状を呈してしまった場合に、自己肯定感が保てなくなることは容易に推測できる(IV B)。このあたりは、児童養護施設に入所してくる子ども達の状況とも共通するのだが、知的障害からくると思われる「僕はだめだ、僕はできない」といった劣等感情は更に大きい。学校でしんどい思いをしている子がおり、その

ことが学校からの連絡帳に書かれていたが、子どもは「連絡帳見ないで」と言ってきた。Bは、その子を追い詰めることなく、子どもに根気よく向き合い、語りかけ続けた。そして子どもからの最終的な言葉は、「じゃあ、(B先生から学校の先生に)書いておいて」という言葉であったという。その子にすれば、自分におけるつらいこと・嫌なことについてこのように語るのがやっとだが、ようやく今生じている事態を回避せず、このように語ることができた子どもへの共感を保育士は大切にする(V B)。あきらめないで向かい合うことで、子どもからの信頼性が育まれることを信じている。質の高いコミュニケーションというよりも、とにかくコミュニケーションできるための、入口としての状況の成立を大切にする(VII B)。

障害児を支える専門職の価値観として、その基礎となるのが、「僕みたいな歳で、人に聞いたら恥ずかしい」と語る子ども達の自信のなさ、辛さ・寂しさへの共感がベースになっているように思われる。他者とのコミュニケーションがとれることによって、子ども達は「自分という存在」を感じ取ることができ、他者からきちっとコミュニケーションを取ってもらえることは、ひとりの人間として尊重されていることを担保する。

#### b-3 重度障害児と向き合う

激しい行動障害を有する重度障害児担当のCのエピソードは更に壮絶である。家庭での悪循環が極まった末の子どもを、共に生活する中で噛まれても叩かれても向かい合い続け、子どもからの自発的な最低限の要求表現ができることを促し待ち続けるが、よほど肝が据わっていないとできるものではない。VCに関しては、以下のような壮絶なエピソードを聴取した。

人と向かい合って関係を持つという事ができ

ずにグチャグチャになっている時に（Ⅳ C）、子どもと関係を持ってくれる大人として、向かい続けることが関係形成のために第一歩となる。家では自分から何もしなかった子が、施設での衣服の着脱場面でも何もしないので、「もういいわ。しなくていい。そのままでもいい」というと、子どもが服を自分で脱ごうとしたという。このエピソードは一見ネガティブにもとれるが、「こちらの関わりを待っているような気もし、…しなければならぬことが何となくわかっているようにも思われた」ということを感じ取った上での関わりであった。

また C は、「子どもが興味を持っていることを、こちらが提案したら、子どもはこっちをむく瞬間に笑ってくれる。それは、その子の求めていること（言葉）を言えた時だと思う」と語ったが、一人の大人としてぶれずに子どもに向かい続け、子どもとの間の変化の兆しを、毅然としかも柔軟に多様に感じ取っているように思われた。了解不能だと受け止められかねない子どもの生活場面において、関係が動きそうだとされるタイミングを見て取るセンスと、緊張と弛緩とでも言えるような他者との間での関係や感情の動きの幅を受け止めていくところが素晴らしい。これらの関わりも、子どもが示すその時々「外界へ向かうトーン」の繊細な聞きわけであろう。

C が大切にしているのは、とりわけ子どもが笑ってくれる場面である（Ⅶ C）。興味や活動や関係が持続するのは、子どもが笑ってくれている時である。このようなことを大切にすると関わりは、保育士側に余裕がなければ、時間をかけてじっくり展開することができない。保育士とのやりとりが少し見えてくると、いろいろなかけひきをしながら、「この子はこれが好きなんだ」ということに気づくことができる場合が増えてくる。このあたりの受け止めは、A 保育

士の「粘土」のエピソードと似ているところがあり、その時・その場の微妙なニュアンスを受け止めるセンスが、知的障害児を担当する保育士の専門性（専門的センス）の共通基盤であるように思われる。

### c 知的障害児を受け止める保育士側の態度

障害によって混沌とした生活世界を生きる子ども達が、保育士と関わることを通じて子どもらしい活動が開始できる入口へと誘われていく。そのことが成立するには、障害児担当の保育士として大切にしている、「保育士の側の立脚点」が揺るがずに持続することが大切であり、多様な障害像を有する個々の子ども達を支える条件となる。支援の場に臨む際の3人の保育士の態度の基調について、主に聴取内容Ⅲ・Ⅴ・Ⅶに基づいて総合的に考察する。どのような子ども達に対し、どのように関わったのかということを通して得た手応えを、援助対象の異なる保育士はそれぞれに積み上げていくのであるが、この内容が知的障害児支援の保育士の専門特性であるといえる。

A は、「その子のお気に入り」を見つけるのが保育士の仕事だと語る。そして、あくまでも受け止めのトーンを子どもに合わせ（チューニング）、子どもと対等な関係を保つことで、子どもからの関わりが始まり、お気に入りが見える。母子通園施設であるので、親として子どもを養育するといった大人からの子育ての枠組みはあまり見えてこないが、育てなければならぬといった大人の立場からの関わりからは、開かれにくい世界があるのだろう。保育士は、子どもから親への代弁機能を果たしていると換言することもできよう。

B の場合は、根気よく生活全般に関わり続け、決して見捨てない母親代わりのような存在である。そこから信頼関係が始まり、自己肯定感が



少しずつ開かれてくる。子どもとしての成長過程の中で障害を引き受け、自信を喪失させながら日々を暮らしている子ども達への共感性がベースである。虐待による入所の場合などは、それぞれの子どもに対する個別の愛着関係の再形成のような意味合いもあるだろう。

Cは、「重度障害の子でも、『私のことがわかってくれたんだ』というのがわかれば、保育士である自分自身が嬉しくなる。子どもが笑ってくれた時に、一番そのようなことを感じるができる」と語る。笑うことに代表される「子どもらしさ」を発見できることが保育士としての原動力になっているという。そして、そのようなスタンスを保つために、「子どもが笑ってくれる時」を敏感に受け止め、C自身にとってそのような状況が生じやすい「食事場面」を最も大切な時間として意識づけている。そして、保育士の側でのこれらの意識づけが、子どもと関わる保育士自身の心の原動力をより強固なものにし、そこから具体的な対人関係形成を実現していく。重度障害児への対応においては、よりプリミティブな生活場面や人間関係への関与・共感が求められるのであろう。

以上のことは、3人それぞれに異なる内容なのであるが、その何れもが子どもの最善の利益を尊重しながら、子どもの代弁者として子どもに寄り添うという保育士業務の基本（柏女、2009）に沿っている。個々の子どもを尊重するということは、何れの職域の保育士においても大切な視点である。しかし、知的障害児施設の保育士の場合は、個に焦点を当て切る姿勢が、他職域の保育士に比べてことさら強いように思われる。現時点で了解できる個々の子どもの特徴を、たとえ断片的なものであっても可能な限り把握し、そこから関わりを展開するという「個別的理解」「個別の接近」の姿勢が、知的障害児支援の保育士業務の出発点になっている。そ

こを基本的立脚点に据えながら、日常の関与において主にどのような点に焦点づけていくのかというところは、A・B・Cそれぞれに異なった展開があるように思われた。

#### d 親を受け止め、親と向き合う

保育士とは、児童福祉法第18条の4に定義されているように、子どもの保育に加えて、「保護者支援」を行う職種である。保護者の相談にのり、子育ての悩みをカバーする「子育てアドバイザー」として活躍できるが、障害児を養育する保護者にとっては、子育ての専門家からのアドバイスがことさら大きな意味を持つ。保護者の現状は様々であるが、障害受容・将来への希望と不安（母子通園施設では、特に入学先に関して）・現状に対する困惑と行き詰まり・各種情報の取得・様々な無理解・関係機関調整・保護者自身の人生見通しなど、保護者はかなり明確で多様なニーズを有している。それゆえ、知的障害児福祉領域の保育士は、Ⅵに示したように、保護者支援において他職域の保育士とは全く質の異なる内容を引き受けなければならない。知的障害児支援に従事する保育士の専門特性は、保護者支援において明確に形成される。

##### d-1 母子通園施設の場合

「家族関係の調整を親子揃って行う」事を目的とした母子通園施設での親との関わりは、親支援が保育士業務の半分以上を占めるという点で、保育所や入所施設とは明らかに異なる（ⅢA）。「子どもに関心を向けられない親」が多い中、保育士はいくつもの葛藤やジレンマに対する母親の気持ちに日々連続的に共感しながら、障害受容に至るまでの様々な母親の感情と向かい合っている（ⅡA）。療育の中で親へも子どもへも対応している母子通所施設のAは、さまざまな障害がある中でも、子どもという時間

が楽しめる方法があることを理解してもらえようように、様々な場面に母に見せるようにしており、子どもが呈する喜怒哀楽の姿を親に示し、それらをどう解釈するのかについてリアルタイムに解説しているが（Ⅵ A）、この方法はかなりの労力と力量を必要とする。

保育士は、母親の子どもへむける愛情が少しでもよくなる様にとの思いを込めて接している。療育場面における子どもの様子を伝えながら、家庭での具体的な子育て対応策を関連づけて提示できるためには、保育士の療育的なセンスやスキルに加えて、子どもの「発達過程の知識」や保育士としての経験値なども大きな要素となる。

Ⅵ A に示したように、「どうすれば子どもをプラスに見ることができるか」ということが、母親支援の大きな命題になる。「家族間の背景が見えないまま、こちらの要求を伝えても、改善は難しく逆に母親のしんどさになってしまう恐れがある。ある程度共感できた上で、母に助言を行っている」と A は語るが、子どもの代弁者として「カウンセリングマインドを持った子育てアドバイザー」としての資質が求められる。そして、これらが通園を重ねる内にうまく展開できた時、母親自身の本質的な不安の理解とサポートにまで至ることができるのだろう。母子通園施設における専門職の内で、母親自身の生活世界に寄り添うという点において、母親に一番近い存在は保育士であることが多いという点も特筆してよい。親子を同時に対応できる業務環境が整っていることが強みとなっている。

#### d-2 入所施設の場合

入所施設の場合の保護者支援は、通園施設のように親子と保育士の三者が頻繁にそろっての支援ができるわけではない。他領域の多くの保

育士は、子どもの育ちと保護者の子育ての支援を行い、子どもと子育てに優しい社会になる事を望んでいるが、入所施設の関わり方は少々異なる事が見て取れる（Ⅵ B・Ⅵ C）。C は、「（親は）子どもの世話ができなくなった自分を責めている」と語ったが（Ⅱ C）、このような感情を持っている保護者のもつ「罪悪感」に配慮した保育士の対応は、保護者の心理的なサポートに大きく作用する。

親子の距離が遠くなってしまった状況の中で、緩やかでも親子をつなぎ止め直すために、親と子の間に存在しなければならない保育士はつらい。B は「面会に来ない親」や、「授業参観に来ると言っておきながら来なかった親」のエピソードを語ったが（Ⅱ B）、その時保育士はその状況を受け止めなければいけない子どもの側に立ちながら、子どもの心をサポートしなければならない。これらのエピソードは、質的には児童養護施設における保育士の立場と全く同じ内容である。たとえ緩やかな進展ではあっても、親と子の代弁者としての位置づけが保育士の中で意識される（Ⅵ B・Ⅵ C）。

ただ、ここで留意したいのはそれらの状況に対する、子ども自身の反応・表現の仕方、それらの状況に対する保育士の対応の仕方、子ども自身の気持ちのおさめ方、本音の出せなさの様子などが、児童養護施設の場合とはディテールが異なるということである。知的障害児の場合は、親に裏切られた気持ちを言葉で表すことがなかなかできず、それらの違いが、障害の有無に起因するのかどうかについては検討する必要があるが（Ⅳ B・Ⅳ C）、今共に過ごしている具体的な子どもの現状に沿った「子どもの代弁者」としての、保育士の具体的な共感内容や共感態度には、知的障害児施設という職域ならではの、現場の知恵（臨床倫理）としての特徴があるように思われる。

Cは、「施設という立場から、親のフォローや子どもの対応をどこまでやれるのかが難しい」と語るが、乳児院や児童養護施設とも共通したジレンマである。しかし、知的障害児施設への入所経過（家庭の事情）は、虐待などの社会的養護を要するものから、家庭養育の行き詰まりや悪循環などによってやむなく入所させた場合まで、かなり多方面にわたることから、また、それぞれの子どもとの施設での人間関係は、乳児院や養護施設とはまた異なった濃厚なものであることも少なくないので、ジレンマの度合いや、ジレンマの様子などは、具体的な業務内容面においても、あるいはそれを受け止める保育士の側の感情面においても、おそらく異なるのであろう。

#### d-3 障害児の親を支援するということ

子どもに障害があるということは、もちろん子ども本人のテーマであるが、同時に親においても根源的なテーマとなる。従って、障害児の育ちに直接強く関与することは、その親との関わりがそれだけ不可避であることを意味する。この点は他の職域の保育士と大きく異なる点になる。Aは、日々の療育活動において母親との関わりを並行的に行っており、Bは、入所してくる子どもの姿から「入所前の親子が背負っていた課題が見える」と語る。またCは、「入所児の親は、施設に入れたという罪悪感を持っておられ、子どもの世話ができなくなった自分を責めている人が多い」と感じている。親へ行う事ができる現実的な関与の濃淡は別にしても、子どもとの関わりを通して（子どもの障害を介在させて）親を受け止め、親と向きあわなければならないのが、この職域の保育士が有する特徴的な専門性の基盤となっている。

### 5 総合考察 ～知的障害児を支援する保育士の専門特性～

生活の質を確保するために解決しなければならない問題を多く抱えた知的障害児（親子）が将来地域で生活をしていくにあたり、援助職は、外の世界に向けた関わりの可能性を拡げ、あるいは少しでも問題を取り除くための援助を一定期間かけて行う必要がある。援助の一翼を担う保育士は、その専門特性を活かしながら、子どもの健康管理や生理リズムの確保も含めて、彼らの生活世界全体を親子に一番近いところで受け止め、その時々必要に応えるという形で生活支援や療育を展開する（浜田・山口、1984）。知的障害児を援助する専門職としての保育士の特性を、まずはこのように了解しておきたい。

その障害ゆえに外界との確かな関係性がなかなか開かれてこず、子どもとしての豊かな生活世界がなかなか確立しにくい子ども達との関わりの中で、その端緒を共に切り開いてゆく保育士が依拠する専門性のベースは何なのか。ともすれば相対的で完結しないそれぞれの子どもの遊びや生活体験の中に、秀でて個別のかつ具体的に参与し、その中で子どもが外界へと向かう兆し（子どもからのトーン）を、断片的な子どもの活動や表情の変化などから、それらを繊細に聞き取る保育士のセンスは重要である。また、子どもが活動できるフィールドは、合目的的に完結・完成するようなものではなく、きわめて断片的であっても、保育士はそのことをいとわない。いわば、完成を見ないモザイク制作のような日々の関与の積み重ねを、「参与可能な生活世界の拡大」とでも定義することができよう。このような、子ども独自の生活世界への保育士の参与態度は、参与観察者によるエピソードの収集とその積み重ねにも似ている。そして、そのことの積み重ねが、子どもへの理解を拡げ、

子どもの未来の発達を切り開いていく。インタビュー内容からも読み取れるように、保育士達は子どもとの生活を通して、子どもにとって関係世界を開いていくためにきっかけとなる「参与可能なフィールド」を細やかに識別し、具体的に提供している。

先の論文において、対人援助職としての保育士の専門特性を、「共感性」「距離感」「メタポジション」という視点から考察した(柴田、2014)。保育士としての専門特性の基盤は他職域の保育士とも共通しているが、保育実践における展開の仕方は、保育所保育士・児童養護施設保育士などとは大きく異なる。先の論文の主人公である子ども達は、すでに対人関係や対象関係の発達を遂げていたり、あるいはそれらの発達過程を豊かに展開している途上に位置している。先の論文で扱った保育士は、それらのことを前提とした子どもとの関係世界の構築である。しかし知的障害児を支援する保育士は、障害を有する子ども達の発達世界を少しでも塑型できるような具体的な活動や関係を、時には子ども本位に、時にはその生活場面の意味を子どもに浸透理解させるように、「参与可能なフィールド」の中で具体的に構築していく事を行いながら、その中で「共感性」「距離感」「メタポジション」という視点を、子どもを中心に据えながら断片的にでも息長く実現していかなければならない。3で述べたことが、それらのことに対する具体的な内容なのであり、他の職域の保育士との差異は、援助すべき生活基盤の内容と、子どもを受け止める際の保育士の力の注ぎどころとその方法の違いによる。

生活をととして子どもを支援する保育士は、日々の生活の中で、子どもにとって相互了解や相互関係が可能な大人(他者)として、ぶれることなく明確に存在する態度をとり続ける。その姿はリーダーシップの強い養育監督者の姿で

はなく、子どもの生活世界の中の「もう一人の住人」として子どものそばに常に共存し、子どもに伴走する他者である。そしてそのような共同生活を子どもが受け入れ、可能にする原理は、保育士の子どもへの共感であり、子どもが示す興味や感情(笑顔など)などにシンパシーを感じ取りながら、一人の子どもとして尊重してくれる「子どもの世界の住人」としての保育士の存在である。子どもの生活全体に参与し、子どもの代弁者として常に活動するという保育士の専門性は、障害児福祉の世界では上に述べたような形で翻訳されるのだろう。

子どもらの「困難」を了解し、それらへの対応を試みる際に、保育士は闇雲な試行錯誤を重ねるのではなく、現実的観点から過去の実践体験例を整理し、それらに照合させながら、他方では主治医・他の専門職・保護者などから広い視野で生活の全体像に関する情報を手に入れ、その都度柔軟な発想で仮説・検証を行いながら、子どもの生活世界に還元させる形で次のステップ付けやその子らの未来を見据える。それが遂行できるためにはキャリアの積み上げが対人援助職の育成上大きな意味を持つ。この領域の保育士が、保育士職の中では一番チームアプローチを徹底させているのかもしれない。

子どもだけでなく、親や兄弟姉妹などの家族関係など、その子が生活をしていく中の支援も同時に行う。「障害児の育ちに直接関与することは、その親との関わりもまた不可避なものになる」ということはすでに述べたとおりである。業務の中で出会う保護者は、障害受容・将来への希望と不安・現状に対する困惑と行き詰まり・各種情報の取得・様々な無理解・関係機関との調整・保護者自身の人生見通しなど、かなり明確で多様なニーズを有しているので、それらに対してまると援助する必要がある。家族との連携や関係調整も欠かせないものになってくる



が、この際に一番大切なのが、保護者への共感性であり、保護者との信頼関係である。デリケートなカウンセリングマインドが求められるが、親子の生活に一番近いところに存在し、生活レベルでアドバイスし、子どもの生活世界の拡大の実際の様子を親に翻訳できることが、対人援助専門職としての大きな強みとなる。

考察の最後に、知的障害児施設保育士の業務（専門特性）を全体的にまとめてみたい（図1）。知的障害児を援助する保育士の援助業務は、子どもの知的障害に起因する支援を必要とする様々な福祉的ニーズ（表1のⅡ）によって開始されるが、個々のニーズを「一人ひとりの子どもが心身ともに健康、安全で情緒の安定した生活ができる環境を用意し、生きる喜びと力を育む」という枠組みで受け止める。そして子どもの背後に存在する親も含めて、知的障害を有する子どもの生活世界全体へ関与し、子どもと共に「養育（生活）」を営む。このような支援が保育士の専門性の本分である。そして、その支

援対象が知的障害児であるという職域特性から、保育士業務は図1に示した業務Ⅰ～業務Ⅳの4点が基本軸となって展開される。

その中でも、子どもへの「個別的理解・個別の接近（業務Ⅰ）」が、まず業務の根幹となるだろう。それを基軸にしながら、支援対象児の状況や、各施設の福祉的役割に応じて、業務Ⅱ・業務Ⅲ・業務Ⅳの3つの軸に沿って（それらを保育士の専門軸に据えて）具体的な保育支援が展開される。それぞれの内容についてはすでに述べたとおりである。誤解を恐れずに述べるならば、3人の保育士においては、いずれも業務Ⅰを基本軸に置きながらも、業務Ⅱ・業務Ⅲ・業務Ⅳへの関与の比重が少しずつ異なっているように思われた。Aは「業務Ⅱ－業務Ⅳ」を主軸に、Bは「業務Ⅲ－業務Ⅳ」を主軸に、Cは「業務Ⅱ－業務Ⅲ」を主軸に、保育実践を展開しているイメージがある。しかし、いずれも業務Ⅰ～業務Ⅳの軸によって構成される知的障害児への生活世界支援体系の中での保育展開がな

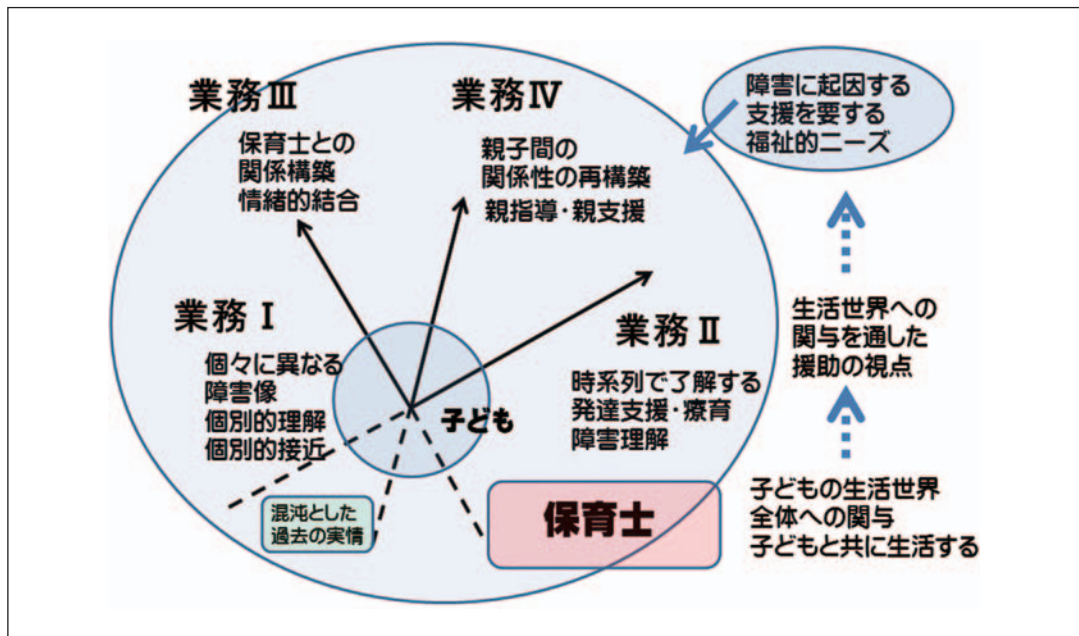


図1 知的障害児施設保育士の関与概念図

されており、これが知的障害児支援における保育士の「対人援助職」としての専門特性の構造であり、内容ではないかと考える。保育士は、子どもの生活世界全体をまず引き受けながら、業務Ⅰ～業務Ⅳの各領域において保育士としての専門性を確立させ、そのことを通して知的障害児支援における保育実践を展開している。

## 6 おわりに

対人援助職としての保育士の多様な専門特性を考察するために、各職域の中堅保育士へのインタビューを行い続けているが、本論はその4作目である（保育士の専門特性に関する研究であるという執筆趣旨を明確にするために、本論から論文名を変更している）。

障害児支援に関する現在の潮流は、障害者自立支援法に基づく福祉制度の整備と、その背景をなす福祉原理が強く表面化してきている。他方で自閉症その他の発達障害に関する臨床像と症候に関する、治療法を含めた各論的な研究が世の脚光を浴びている。前者は福祉を包括的に定めていく領域であり、後者はまさにスペシャルな領域である。しかし、障害を有する子どもにとって大切なのは現実的な日々の生活の営みであり、それを具体的に支える専門職のひとつが保育士である。そのような保育士業務は、子どもの生活世界を支えるという現実的かつジェネラルな領域であり、これらは目新しいこととして脚光を浴びるようなものではないが、子どもの日々の幸せを具体的に実現できるためには、このような職域における専門的な資質の担保と向上こそが大切であろうという認識から、本研究を継続してきた。

本研究が取り扱う内容は、地味で新鮮味に乏しいと捉えられるかもしれないが、子ども全体の幸せを担うのが保育士業務であるので、更に

立場の異なる保育士へのインタビュー調査を今後も継続していきたい所存である。また、この研究を通して知り得た現場保育士の保育内容（専門特性）を、様々な現場における保育士をめざす学生が感じ取っていくことにも、大きな意義があると考ええる。

稿を閉じるに当たり、ご協力いただいた3名の保育士に心からの謝意と敬意を表します。

## 引用文献

- ・American Association on Intellectual and Developmental Disabilities. (2012). 知的障害定義、分類および支援体系（太田俊己・金子健・原仁・湯汲英史・沼田千好子共訳）. 日本知的障害福祉連盟. (American Association on Intellectual and Developmental Disabilities. (2010). Intellectual Disabilities : definition, classification, and systems of supports. - 11th ed.).
- ・浜田寿美男・山口俊郎. (1984). 子どもの生活世界のはじまり. ミネルヴァ書房
- ・柏女霊峰監修 全国保育士会編. (2009). 改訂版 全国保育士会倫理綱領ガイドブック. 社会福祉法人全国社会福祉協議会
- ・厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部・障害福祉課地域移行・障害児支援室. (2012). 障害者自立支援法・児童福祉法等の一部改正に伴う指定に係る留意事項等について. 厚生労働省（通知）
- ・厚生労働省・障害児支援の在り方に関する検討会. (2014). 今後の障害児支援の在り方について（報告書）～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～. 厚生労働省
- ・厚生省児童家庭局長. (1993). 強度行動障害特別処遇事業の実施について. 厚生省（通知）
- ・柴田長生. (2011). 対人援助職としての保育士の可能性（試論的検討）—児童相談所・婦人相談所の一時保護所保育士業務から見えるもの—. 2010年度心理社会的支援研究 創刊号 pp.73-85. 京都文教大学
- ・柴田長生. (2013). 対人援助職としての保育士の可能

性 2 一乳児院・児童養護施設での保育士業務  
から見えるもの一. 2012 年度心理社会的支援研究  
第 3 号 pp.3-24. 京都文教大学

- ・柴田長生. (2014). 対人援助職としての保育士の可能  
性 3—保育所での保育士業務から見えるもの一.  
2013 年度心理社会的支援研究 第 4 号 pp. 97-117.  
京都文教大学

- ・全国児童養護施設協議会. (2008). この子を受けとめ  
て育むために. 全国児童養護施設協議会

*Abstract*

## A Study about the Professionalism of Childcare Workers Who Work in Various Professional Areas 1: For Intellectual Disabled Children

Chosei SHIBATA, Noriko GOTO

In this report, we studied it about the professionalism of childcare workers to act in various professional areas. We undertook interviews about the professional potentialities of childcare workers who take care of disabled children for the fourth report. We considered the possibility of the professionalism of childcare workers in the care of the intellectual disabled children from their interview data. The results of these considerations are as follows:

1. The care to the intellectual disabled children by childcare workers is begun by the occurrence of a wide range of needs having to do with welfare that it isn't possible to do breeding, being good only in the concerning by the parent and child.
2. Childcare workers take care of disabled children through general, daily living activities. Through overall participation in daily living, we find an opportunity for interpersonal relationship formation with the children.
3. Deepening the relationship with a childcare worker becomes the trigger for interpersonal relationship formation with disabled children. The discovery is carried out in step by step. Childcare workers taking care of disabled children are superior in their sensitivity to them.
4. Childcare workers are undertaking parental care of disabled children as well as being concerned with the child in terms of nurturing skills, disability acceptance, anxiety for the future, and so on.
5. The main duties of a childcare worker are to enlarge the field where a disabled children is concerned, through enhancing skills in daily living. Disabled children improve their ability for living by this support from a childcare worker.

The professionalism of childcare worker is realized through the professional characteristics of Numbers 1-5 regarding the care of disabled children.

Childcare workers can contribute to the care of disabled children by the development of their professional potentialities.

Key words: childcare worker, intellectual disabled children, professionalism